

## 吉村順三夫妻が育て上げた音楽教室

ソルフェージュスクール 一九六七年

文・写真 松隈洋「神奈川大学建築学部教授」

こんなに可愛らしい子供たちの隠れ家のような音楽の空間が存在していたのか、そう思えるほど新鮮な驚きと発見があった。二〇二三年六月、東京都豊島区の山手線目白駅ほど近くの閑静な住宅地の一角に建つソルフェージュスクールという名称の音楽教室を訪ねた際の印象だ。創立者はヴァイオリニストの大村多喜子（一九一六〜二〇二二年）、設計は夫の東京芸術大学建築科教授の吉村順三（一九〇八〜一九七七年）が手がけている。す

三階の一〇〇人収容のホール



なわち、ここは、吉村夫妻が共同で立ち上げ、育て上げた唯一無二の音楽教育のための空間なのである。その出発点となる二人の出会いも、時代の偶然が与えた一期一会に始まる。一九三六年、二〇歳で単身渡米した多喜子は、ニューヨークの名門ジュリアード音楽院でヴァイオリンの稽古に励んでいた。一方、吉村は、一九二七年、東京美術学校二年生の学生時代からアントニン・レーモンド事務所に

北西側から見る建物全景



所員となつて働いていた。だが、日中戦争後の日米関係の悪化から、一九三八年にレーモンドはアメリカへ帰国し、フィラデルフィア郊外のニューホープの農場を購入してアトリエと自宅を構え、設計活動を続けていく。そして、一九四〇年、日本大使館の仕事に依頼されたレーモンドからの要請で、吉村は単身渡米し、ニューホープのアトリエに勤め始めるのだ。しかし、真珠湾攻撃前夜の急激な状況の暗転により、一九四一年七月、最後の日本への帰国船となる龍田丸に乗り、船上で乗り合わせた多喜子と出会うのである。帰国後、太平洋戦争下の一九四四年、二人は結婚する。敗戦後の一九五〇年、多喜子は、再びジュリアード音楽院へ留学し、一九五二年の帰国後は演奏活動を再開させる。そして、一九六一年、ある思いから、音楽仲間たちと共同で開校したのが、ソルフェージュスクールだった。後年の一九七七年、『機関誌』ソルフェージュ音楽』第一号に、多喜子は、次のように書き留めている。

「音楽は真・善・美に対し直接的な感動をもつとも情緒的に表す芸術、感動を育てることで、社会生活で大切な人間相互の善意への信頼につながる清く美しい心を養う。この精神に基づいてソルフェージュを基礎とした音楽教育を始めた。」

ソルフェージュとは、フランス語で、それぞれの音符を、ドレミを使って声に出して歌うことを意味する。フランスやイタリアで数百年行われてきた音楽の基礎教育だという。その目標は、子供たちの聴音の能力や音

感を育て、リズム感や読譜力を養成するために、楽しく音楽させて、小さいころから体で音楽に親しむ環境を整えてあげることにかけている。そして、それに相応しい場所だと考えたのだろう。目白の閑静な住宅地の一角に敷地を求めて音楽教室を移転し、吉村の設計により新築されたのが、ソルフェージュスクールである。この音楽教室は、北側と西側を幅員四mの道路に面する敷地面積約一六〇㎡の角地に、それとは気づかないほど周囲に溶け込んで建っている。鉄筋コンクリート造、地上三階建て、延床面積約三〇〇㎡の小ぶりの規模である。一階に玄関ホールと職員室などの諸室、二階に個別レッスンに利用される四つの教室と楽器庫、三階に一〇〇人収容可能な約八五㎡の天井の高いホールがコンバクトに配置されている。住宅地の中の音楽教室という特殊な用途のため、慎重な建設計画が検討されたに違いない。建築に求められたのは、レッスン時の各楽器の演奏に相応しい部屋の大きさと集中しやすい雰囲気、音の響きの良さ、そして、外部への遮音と近接する住宅のプライバシーを守るという高いハードルだった。

そこで、吉村は、斜線規制や高さ制限の枠組みを最大限に活かすために、一、二階の階高を住宅のスケールに近い約二・五mに抑えて、三階ホールの天井高さを確保する。同時に、斜線規制を巧みに利用した勾配屋根とすることによって、音を奏でるホールとして必要な空間の容積を満たしながら、音の響きにとって好ましい形状を割り出していく。また、遮音と周囲の住宅を見下ろすことによるプライバシーの侵害を避け、音楽に

集中できる室内環境を整えるために、ホールの北側から西側へと連続する開口部の高さを六〇cmに抑えつつ、窓台下部に椅子を収納する戸棚を設けることで、開口部に奥行き感を与え、ホールの視界を適度に制限する工夫も施された。さらに、こうして生み出された最大高さ約四mの勾配天井を、木軸の骨組みの上にラワンベニヤで全面的に覆うことにより、簡素でありながらも、柔らかく包み込まれるような、音楽のための落ち着いた空間が誕生したのである。

吉村が手がけたのは、建築や受付カウンター、造り付けのベンチ、に留まらぬ。楽器を演奏する前に、鉛筆を持ってない幼児たちに触れさせるのが、ソルフェージュットと呼ばれる独自の教育器具である。これは、プラスチック製の音符や休止符などの形をしたピースを五線譜に並べて楽しく音楽を学ぶ器具で、フランスの音楽教育家によって開発されたものだ。吉村は、この器具を復元してデザインし、スクールのパンフレットのイラストなども描いていたのだ。また、ロゴマークは、交友のあった亀倉雄策がデザインしている。創立から半世紀以上の歴史が積み重ねられ、二〇二二年に公益財団法人へ移行登記されたソルフェージュスクールからは、世界で活躍する多くの音楽家が巣立ち、卒業生の何人かは、今もここで教えている。そして、その中心にいるのは、チェリストである息女の吉村隆子さんだ。こうして、吉村順三と大村多喜子が仲間たちと築き上げた音楽のための空間からは、変わることなく、子供たちの奏でる楽器の音が聴こえてくる。